

令和6年度栃木県総合教育会議

議事録

日 時 令和6年10月22日（火曜日）
午後3時00分から午後5時00分まで

会 場 公館大会議室

| | | |
|-----|----------------|---------|
| 出席者 | 教 育 長 | 阿久澤 真 理 |
| | 教育委員（教育長職務代行者） | 板 橋 信 行 |
| | 教育委員 | 鈴 木 純美子 |
| | 教育委員 | 永 島 朋 子 |
| | 教育委員 | 松 金 公 正 |
| | 知 事 | 福 田 富 一 |

1. 開会

○司会 定刻となりましたので、これより令和6年度栃木県総合教育会議を開催します。

当会議は、栃木県総合教育会議設置要綱第5条に基づき、公開で行うこととなっておりますので、御了承願います。

また、尾崎委員におかれましては、本日所用により欠席となっておりますので、御報告申し上げます。

2. 挨拶

○司会 はじめに、福田知事から御挨拶を申し上げます。

○福田知事 皆様、こんにちは。

御多忙の中、教育委員会の皆様方には、栃木県総合教育会議に御出席いただきまして、誠にありがとうございます。また、日頃から本県の教育施策の推進に多大なる御尽力をいただいておりますことに、改めて御礼と感謝を申し上げます。

さて、昨今の教育を取り巻く状況は、急激な情報化やグローバル化の進展などにより大きく変化しており、これからの時代の様々な社会課題に対応していくため、教育が果たす役割は、ますます重要になってきております。

こうした中、総合教育会議では、「とちぎの未来の教育について」を議題とし、栃木県教育大綱における10項目の「施策の方向」を取り上げ、皆様方と意見交換を行って参りました。

来年度は、次期大綱の策定の時期を迎えますことから、本日の会議の前半には、現教育大綱に基づく施策の取組状況等について説明し、御意見をいただきたいと考えておりますので、よろしく願いいたします。

また、会議の後半は、施策の方向の中から「社会に参画する力を育む教育の充実」と「学校・家庭・地域の連携・協働の推進」に関連する取組を行っております、真岡北陵高校と益子芳星高校の校長先生をはじめとする皆様をお招きいたしまして、各学校の取組についてお話しいただく予定となっております。

2校の説明を聞いた上で、率直な意見交換を行い、「とちぎの未来の教育について」10年後、20年後を見据えながら、皆様方と幅広く議論をして参りたいと考えておりますので、お願い申し上げます。

3. 議題

栃木県教育大綱に基づく施策の取組状況等について

○司会 それでは、これより議事に入ります。

ここからの議事の進行は本会議の招集者である福田知事にお願いします。

○福田知事 はい、それでは、まず議題(1)の「栃木県教育大綱に基づく施策の取組状況等について」議事を進めます。

現在の栃木県教育大綱につきましては、対象期間が令和3年度から令和7年度までの5年間となっております、来年度は、次期大綱の策定に向けた協議を行って参りたいと考えております。

それに先立ちまして、今回は現在の栃木県教育大綱に基づく施策の取組状況等について説明をいたします。その上で皆様の御意見を伺いたいと思います。

それでは、事務局から説明をお願いします。

○事務局 議題(1)について説明いたします。

まず、資料2の「栃木県教育大綱」の2ページを御覧ください。

「2 大綱の位置付け」に記載がございますように、この大綱は、本県の教育、文化等の振興に関する総合的な施策について、その目標や施策の根本となる方針を定めたものであり、対象期間は、令和3年年度から令和7年度までの5年間となっております。

続いて、5ページの「第3 施策の方向の体系」を御覧ください。この体系図のとおり、大綱では3つの「基本目標」と、その下に10個の「施策の方向」を定めております。また、それに加えまして、基本目標全てに関連する「施策の方向プラス」を定めております。

次に、資料1で各施策の主な取組状況について説明いたします。

まず、1ページを御覧ください。アンダーラインの箇所が「施策の方向」でございます。

「施策の方向1 確かな学力の育成」においては、とちぎっ子学習状況調査の実施による学力・学習状況の把握・分析や、幼小カリキュラム接続事業等の取組を行っております。

「施策の方向2 豊かな心と健やかな体の育成」においては、「G7栃木県・日光男女共同参画・女性活躍担当大臣会合」を踏まえたデジタル学習教材等の作成や配布、子どもたちの更なる体力向上を推進する「とちぎっ子体力ジャンプアッププロジェクト」等の取組を行っております。

「施策の方向3 子ども一人ひとりに応じた教育・支援の充実」においては、障害のある児童生徒の一貫した支援体制の構築や、不登校児童生徒に対する適切な支援のためにスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの配置等相談・支援体制の充実等の取組を行っております。

次に、2ページを御覧ください。

「施策の方向4 教育の基盤の充実」においては、教育活動における安全管理の徹底のための各種研修会の開催や、ICT活用に関する実践事例の発信、情報モラル教材の作成・活用、また、教員の働き方改革推進のための業務改善マネジメント研修の実施等の取組を行っております。

「施策の方向5 自分の生き方を考える教育の充実」においては、小中学校及び義務教育学校におけるキャリア・パスポートの活用によるキャリア教育の充実、「じぶん未来学」の実施等の取組を行っております。

次に、3ページを御覧ください。

「施策の方向6 社会に参画する力を育む教育の充実」においては、県議会議員の高校訪問等による主権者教育の充実強化や高校公民科「公共」の授業づくり支援、高校生の選挙や政治への関心の向上等を促すためのオンラインセミナーの実施等の取組を行っております。

「施策の方向7 学校・家庭・地域の連携・協働の推進」においては、地域学校協働活動推進員や地域コーディネーターの養成のほか、学校と地域の連携・協働の実践事例をまとめたハンドブックを活用した地域学校協働活動への支援などの取組を行っております。

次に、4ページを御覧ください。

「施策の方向8 ふるさとへの愛着や誇りを醸成する教育の充実」においては、県立学校における「とちぎふるさと学習」に関する資料等を活用した郷土愛の醸成や文化財を活用した学習機会の提供等の取組を行っております。

「施策の方向9 高度な知識・技術、多様な文化に触れる教育の充実」においては、インターンシップ推進事業の実施による職業体験活動の機会の充実支援やモデル校におけるSTEAM教育の推進、高校生短期留学プログラム支援事業等による留学の支援等の取組を行っております。

「施策の方向10 スポーツ・文化の振興と生涯学習の推進」においては、「とちぎ県民カレッジ」事業や「とちぎ子どもの未来創造大学」事業の実施による多様な学習機会の提供やいちご一会とちぎ国体・とちぎ大会の開催や大会を通じて培われたレガシーの承継等の取組を行っております。

次に、5ページを御覧ください。

「施策の方向プラス 心身の健康と豊かな人間性を育む食育の充実」においては、基本目標1から3までの実現に向けて、食育の充実の観点から、記載されている各種取組を行っております。

次の6ページからは、現行栃木県教育大綱の4年間の取組の成果を評価する上での参考として、栃木県教育振興基本計画2025等において設けている成果指標の中から、栃木県教育大綱の施策に関連する主な成果指標を「施策の方向」ごとに記載したものでございます。

栃木県教育大綱は、施策の目標や根本となる方針を定めたものであるため、具体的な成果指標を設定しておりませんが、栃木県教育振興基本計画2025等との整合も図られたものでございますので、御確認をいただければと思います。

最後になりますが、栃木県教育大綱については、来年度に、令和8年度から令和12年度までの5か年を期間とした次期大綱を策定していくこととなりますが、同時に次期計画の策定に向けた検討も行う必要があります。

本県では、知事と教育委員会がこれまでも密接に連携して教育施策を進めてきたため、「栃木県教育大綱」と「栃木県教育振興基本計画2025」の内容は、方向性を同じくするものとなっております。

こうしたことを踏まえて、次期大綱については、次期計画と一体的に策定することを想定して検討を進めて参りたいと考えております。

それぞれの施策のより一層の充実を図るとともに、県民が分かりやすい形にして参りたいと考えております。

議題(1)についての説明は、以上でございます。御審議について、よろしく願いいたします。

○福田知事 ありがとうございます。ただ今、事務局から説明がありました。現在の取組状況を踏まえ、次期大綱を策定するに当たり、どのようなことを念頭に置くべきか、今後本県の教育において重視すべきこと等について、各委員の御意見を申し上げます。

板橋委員から申し上げます。

○板橋委員 3点発言させていただきます。

1点目は、「施策の方向3 子ども一人ひとりに応じた教育・支援の充実」について、障害のある児童生徒や不登校の児童生徒、そして、日本語指導が必要な児童生徒といった一人ひとりに応じた教育が進められていることは、素晴らしいことだと思います。

一方で、障害のない児童生徒も、それぞれの個性があり、画一的な教育でない個別最適な学習がより求められるような時代になってくると思います。そうした学習によって、そもそも不

登校を減らすということにもつながるかもしれません。

そのためにはやはり、ICTツールが普及して参りましたので、利活用をより促進していただいて、一人ひとりに対応した教育ができるということをより望みたいと思います。なかなか、これだという施策がないかもしれませんが、いろいろな事例を参考にしてトライをしていただくということをお願いしたいと思います。

2点目が、「施策の方向5 自分の生き方を考える教育の充実」というところです。こちらでもキャリア教育、「じぶん未来学」など、おもしろい取組がされていると思いますが、企業の立場からして、今後学生に期待することのひとつとしては、やはり主体性ということがあるかと思います。この主体性というのは、非認知能力と言われてはおりますが、非認知能力もいかに高めていくかということにも直結しているように思います。

先ほどICT教育の話もさせていただきましたが、ICTツールにより時間を効果的に使って、新たにできた時間で探究型の学習や、グループ学習の充実をさせていただければと思います。グループ学習も相手の意見を聞き、いかに対立を超えて合意をしていくかという経験にもつながるかと思えますし、協働して作り上げることの喜びこそ、まさに集団で学校において行う教育の成果の一つだと思いますので、そういったところの充実をよりお願いしたいと思います。

3点目は、「施策の方向6 社会に参画する力を育む教育の充実」ですが、選挙権が18歳からとなりましたが、周りを見ると学生の方はまだ当事者意識が薄いと感じられます。既に取組をされておりますが、主権者教育をしっかりと充実させていただき、そうすることによって、日本の今後に対する社会参画意識を高めていただけないかと思えます。

以上3点です。

○福田知事 ありがとうございます。ICTツールの利活用促進により不登校をなくしていく、グループの探究学習により主体性を確立する、主権者教育は重要なことなのでさらに強化すべきであると、こういった御意見をいただきました。ありがとうございます。

それでは鈴木委員をお願いします。

○鈴木委員 私からは、「施策の方向3 子ども一人ひとりに応じた教育・支援の充実」の就学前から学校卒業後までの一貫した支援体制の構築の取組に関して、障害があることをどうしても親が認められない場合があり、支援が受けられないお子さんもいます。そういったお子さんはその後の学校生活で大変苦勞をすることがあるので、就学前の幼稚園等で、障害に対する親の理解をどう周知するか、これは福祉との連携が必要となってきます。就学後に学校がづらい場にならないように、そのことが原因で不登校になる場合もあるので、就学前から障害の傾向があるお子さんを持つ親の理解促進を含めた支援を重点的に行っていただきたいと思えます。

加えて、インクルーシブ教育システムの推進です。現場の先生方とお話する機会があり、必ず聞くのは、教室が足りないということです。児童生徒全体の数は年々減っているのにもかかわらず、特別支援学校の児童生徒数は変わらない、もしくは徐々に増えている状態で、年々教室は不足していく一方です。

宇都宮青葉高等学園等、新しく学校が開校する一方で、教室の数は足りず、学校によっては特別教室をなくして普通教室として利用しているところもあると聞いています。このことに対して、例えば市町で使わなくなっている小学校、中学校の教室を利用するなど、そういった

案は出ているのですが、これからどういったかたちで子供たちがゆったりと教育を受けられるようにしていけるかというところで皆さんの協力をお願いしたいと思っています。

次に、施策の方向9のインターンシップ推進事業の実施による各校における職業体験活動の機会の充実支援についてですが、基本的に職業系の高校が主だと思いますが、普通科の高校においてもインターンシップができればよいと考えております。中学校までは職業体験という時間がとられていますが、高校に入ると、受験に向けての学習のみになってしまうので、例えば将来先生になりたいと思っている生徒が学校に体験に行けるようなことが、高校においてもできるようにすると良いと考えます。

私からは以上です。

○福田知事 ありがとうございます。障害のある児童に対して、就学前の支援体制や環境整備、また特別支援学校については、学びの場の環境整備が追いついていないことから、しっかり整えないといけないということ。また、普通科高校においてもインターンシップが重要という御意見をいただきました。ありがとうございました。

松金委員、お願いします。

○松金委員 いまお二方の委員からお話しをいただき、私も同じ意見を持っているところです。今日、ご報告いただき、強く感じることは、生徒だけでなく教員や地域社会についても、変化に対してどのように備えていくかということだと思います。

これまで読ませていただいた色々な資料に、将来の予測が不可能な変化というものが出てきますが、そう書くと分かりにくいのですが、我々は今大きな変化を目の前にしています。

雑談のようになってしまいましたが、大リーグの大谷翔平選手の活躍のように、漫画のようなことが現実に起こるといふ、楽しい見方をさせていただいていると思いましたが、それが楽しいことばかりではなく対応が非常に困難なものを持ち込むといったようなこともあります。変化というのは、これから先、我々が考えているよりもはるかに早いスピードで起こるのではないかと考えています。

そういう意味では、施策の方向1や2、3といったところは、学び続ける児童生徒を育成する、また、誰一人取り残さず学び続けることができるような児童生徒への対応というのが、一つ目の重要なポイントかと思っています。

その中には、一人ひとり違う能力に、どうやって学校や地域が対応していくかということに、重点的に取り組んでいく必要があるということが、ひとつの直近の課題かもしれないと思っています。

加えて、学び続けることができる新しいシステムをどのように作っていくかというハードの部分の課題もあります。学校というものが、教員と児童生徒だけのものではなく、地域や企業が入り、それらが一つの輪となって、「一貫」という言葉が資料にも出てきますが、どのように全部を横に繋げていけば、一番いいのかということを考えていけるような材料が今日の報告の中にはありました。どのようにつないでいくといいのかなということを考えているところです。

もう一つは、それをどうやって支えていくかということだと思います。支えていくためには、地域との関係性というのが重要になってくると思います。こちらについては、先ほどご意見がありましたので、割愛させていただきます。

さらに、変化に伴い、今対応することが、どんどん増えていくということがあります。増え

れば何かを減らさないと、私たちの時間は限られていますので、そういう中で、働き方改革をどう進めるかということが重要なポイントになってきます。

そこでやはり、ICTやDXの活用になってくると思いますが、DXをどのように進めて、増えていくものに対して、整理して減らしていけるものは何か、どうしても減らせなければ、何を増やすのかを考えていく必要があると思っています。

今日の報告を受け、ウェルビーイングという最近の言葉がありますが、栃木から幸福をどう発信していくかが教育を強化するために一番重要なポイントだと思いますので、我々が予見できない未来に対応しなければならない子どもたちをどのように育てていくか、ということを考えましたので、ご検討いただければと思います。

○福田知事 ありがとうございます。学び続けるというのは、社会人になってからも学び続けるということでしょうか。

○松金委員 これは、子供たちが教員から教えられるだけではなく、自分で将来的にも学び続けることができるということだと思います。少なくとも、小学校、中学校、高校の段階で、自分はどう学んでいけばいいのかということ、自律的に考え続けるといった意味です。

○福田知事 小、中、高校まで学び続けることができる環境整備ということですね。それから、地域と連携し子供たちを支える仕組みが必要で、そのためには時間を生むことが必要で、その選択をするには、働き方改革を進め、DXを推進し、仕組みを作っていくことが重要ということですね。ありがとうございます。

永島委員、お願いします。

○永島委員 私からは、「施策の方向4の教員の働き方改革」についてです。委員の皆さんがそれぞれ仰っていただいたことと同意見ではありますが、先生方が毎日充実して楽しめる職場でないと、生徒も楽しく学べないという観点から、働き方改革の推進は急務ではないかと思っています。

私たちも日々仕事をしながら生活をしていますが、職場環境においては人的なストレス等がありますので、そういうところが子供たちに大きく影響を与えてしまうと、施策の3や7などにもある不登校に繋がっていくようなところがあります。負の連鎖のようなものを学校が生んでしまうかもしれない、松金委員も仰っておりましたが、生徒と先生だけの学校ではなくて、地域や企業、行政も交えて、栃木の子供たちをみんなで育てていく機運を高めていくことが、今後の栃木の教育にとって、とても重要なことではないかと考えております。

今までも地域との連携をしていますが、もっと地域を活用した取組を加速していただき、子供たちを支える仕組みを作っていけたらいいのではないかと思います。これまでは、学校から頼まれて地域の人たちが参加するということがあったかと思いますが、地域から提案をする等、子供たちを支える色々な仕組みを次期計画では推進できればいいのではないかと思います。

私からは以上です。

○福田知事 ありがとうございます。

学校運営について地域からも提案できる仕組みを作ってはどうかという御意見をいただきました。それは、児童生徒を地域も含めて支えていくということが重要だからということでした。それらを含めて、教育長の意見をうかがいたいと思います。

○阿久澤教育長 委員の皆様から、様々なご意見をいただきました。私も教育委員の一人として、こ

れからの栃木の教育をどのように進めていけばいいのか、日々考えているところですが、松金委員からあったように、社会はどんどん変化して行く、これは一つのキーワードではないか思っています。

今までよりも更に速いスピードで、人々の価値観や社会が多様化し、見通しが難しい中で、子供たちがどう生きて行くのかをしっかりと考えた時に、ありきたりな言葉かもしれませんが、ハードとソフトといった基盤整備と、そこに新たな展開を加えるという2つについて考えているところです。

基盤整備については、県としては35人学級を先駆けて導入してきました。今回の高校再編でも、未来共創型の学校を新設し、産業教育に力を入れることに加え、夜間中学の設置など、できることを着々と進めてきたと思います。今後のことを考えると、安全・安心というのを全面に出していくということもあります。エアコンなどもその一つかもしれませんが、学校において良い環境をしっかりと整えていくということも必要です。さらに、時代の変化に対応した教育のレベルをしっかりと上げていくため、ICTの活用や産業教育における環境整備等もあると思います。まずはしっかりとした基盤整備を行うことが、これからの時代に選ばれる学校になっていくために必要だと思います。

もう一つ、新たな対応策として、本日の後半でテーマとなりますが、社会との連携が重要になってくると思います。学校の中だけでは学べることに限りがあり、地域社会の中には、様々な学びの要素が多く眠っていると思います。子供たちが地域に目を向けることで、郷土愛にもつながっていくと思います。様々な社会の有り様を、その発達段階に応じて、知っていくと言うことがこれから必要になってくると思います。

STEAM教育でも、自ら課題を見つけ、調べ、みんなで議論をして発表するというまでのコミュニケーション能力を培えるということになりますので、教科書を読んで理解をするというのも基礎的な部分で大切ですが、加えて総合的な力を養い、不確定な社会の中でどのようなことが起きても自分の考え方をしっかりと持つことができる教育をしていくことが重要かと思っています。

教育委員会としても、基盤整備と社会や地域との連携を今後の大切な課題として進めていきたいと思っています。

○福田知事 ありがとうございます。環境整備も含め、学校や先生にどのようなものを求めていくのか、これから特に力を入れて行くべきテーマは何かといった観点から、委員の皆様から御意見をいただきました。

本日、県政世論調査の結果を発表しましたが、栃木県に対する愛着度が過去最高の76.1%になりました。これは、ふるさと学習や、地域学などを小・中・高等学校で粘り強く進め、また子供たちもしっかりと学んでくれたということが背景となったと思っています。

また1ヶ月近く前の発表になりますが、学校給食の地産地消率が本県は80%弱となり、山口県に次いで全国2位となりました。学校給食で子供たちが食べているものの8割近くが地域のものということで、食育という点でも、健康づくりという点でも、望ましい結果が表れています。

これも地道な取組の成果かと思っておりますので、この施策の方向10と施策の方向プラスについては、取組の成果を上げることができたのではないかと思います。

本日の御意見も盛り込みながら、今後新たな計画づくりを進めて参りたいと思っています

ので、引き続きよろしく申し上げます。

それでは、予定の時間になりました。

以上で、前半の協議を終了します。

○司会 ありがとうございます。

それではこれから後半の議事の準備のため、休憩に入ります。

○司会 それでは、会議を再開いたします。

ここからの議事の進行は、引き続き福田知事に申し上げます。

○福田知事 それでは、議事を再開します。

議題(2)「とちぎの未来の教育について」、今回は教育大綱の「施策の方向6 社会に参画する力を育む教育の充実」及び「施策の方向7 学校・家庭・地域の連携・協働の推進」について、意見交換を行いたいと思います。

まず、事務局から今回のテーマについて、その後続けて、真岡北陵高校と益子芳星高校からそれぞれの施策の方向に関する取組について、説明をお願いします。

○事務局 それでは、資料3を御覧ください。

資料3の「議題 とちぎの未来の教育について」は、教育大綱の中から「施策の方向6 社会に参画する力を育む教育の充実」及び「施策の方向7 学校・家庭・地域の連携・協働の推進」を具体的なものとして捉えて意見交換をしていただくため、教育大綱におけるこの2つの施策の方向に係るものを抜き出したものでございます。

施策の方向6も施策の方向7も基本目標2に位置付けているものであり、この目標は、「人との関わりを通して生き方についての考えを深めることによって自分の未来を創る力を育む」ものとしております。

施策の方向6については、「社会の出来事を自らの問題として捉え、身近なところから取り組むことなどを通して、社会の一員として必要な判断力や実践力等を育み、SDGsの達成など、今後の社会の在り方についての考えを深める教育を推進する」こととし、施策の方向7については、「子どもたちが多様な人々との関わりの中で様々なことを経験しながら、幅広い年代の人々も互いに学び合うことができるよう、学校・家庭・地域の連携・協働を一層推進する」こととしております。

その下に、それぞれに「主な取組」が記載されており、先ほど知事からもございましたが、この後、関連する取組を行っております学校の皆様からも御説明をいただきます。

まず、施策の方向6の主な取組のうち、「若者の地域活動への支援による社会参加の促進やリーダーの育成」に関することについて、真岡北陵高校の校長先生及び生徒の皆さんから御説明をいただきます。

次に、施策の方向7の主な取組のうち、「地域課題解決に向けた高校・大学等と地域・企業等との連携・協働の取組の促進」に関する取組について、益子芳星高校の校長先生及び生徒の皆さんから御説明をいただきます。

それでは、まず、真岡北陵高校の皆様、よろしく願いいたします。

○真岡北陵高校生徒 皆さん、こんにちは。真岡北陵高校の発表をさせていただきます。

本校は明治41年に、芳賀郡立農林学校として開校し、今年で117年目の歴史と伝統を誇る、農業、商業、福祉の5学科で構成された専門高校です。

本校の校訓、「今日を感謝し、最善を尽くす」は、二宮尊徳の報徳訓の教えを読み解いたものとされています。

本校は、令和4年9月2日、ユネスコスクール・キャンディデート校として承認されました。ユネスコスクールは、ユネスコの理念を実現するため、平和や国際的な連携を実践する学校で、E S Dの推進拠点にもなっています。ユネスコスクール・キャンディデート校としての取組を行う際のキーワードは、E S D、平和学習、そして国際的連携です。

本日の発表は、この3つのキーワードに関する活動を順に紹介し、最後に本校独自のE S D活動、E S D実践隊の取組について御紹介いたします。

まず、最初に、食品科学科によるE S Dの紹介です。本校は、令和4年度からの3カ年計画で、「未来を創る高校生地域連携・協働推進事業」に取り組んでいます。

はじめに、北陵給食 day での取組を紹介します。真岡市第一学校給食センターと連携した給食メニューの開発では、12月に実施した北陵給食 day において、食品科学科の生徒が考案した献立が、真岡市内の小中学校に提供されました。

また、食品科学科は、これまでの活動実績が認められ、「はがいちご応援隊」に任命されました。「はがいちご応援隊」は、イチゴを始めとした芳賀地域の農産物のブランド力向上と、地域活性化を目的とした団体で、私たちはその中で、イチゴの商品開発を中心とした活動に取り組みました。活動の様子は、いちご王国の応援メッセージとしても取り上げられました。

最後に、芳賀地区の野菜消費促進に向けた啓発活動について御紹介します。この取組は、食品科学科とカゴメ株式会社との共同研究として進めています。具体的には、野菜摂取レベルをベジチェックにて調査するものです。ベジチェックとは、皮膚に含まれるカロテノイド量を測定することで、野菜摂取の充足度を調べることができる装置です。芳賀地区の各地で調査を行い、現在では、小・中学生と連携することにより、食育活動にもつなげています。これらの取組は、今年5月27日に、ビジネスや芸術など多方面で活躍する若者を顕彰する、第7回とちぎ次世代の力大賞で、審査員特別奨励賞を受賞し、下野新聞社の社長より表彰をいただきました。

続いて、介護福祉科の取組です。最近では介護実習で外国人介護人材の方々と接する機会が増えてきました。その理由に、介護人材の確保が急務になっている背景があります。共通の目的である福祉を通して実習先の施設に勤務する外国人介護人材の方々と一緒に、本校の英語科教員と真岡市社会福祉協議会の協力の下、介護技術と日本文化を学び、障害者施設のオリジナル手ぬぐいを制作しました。老人ホームの施設長さんより、誰にでもわかりやすい話し方を意識して仕事をしている、という話を聞くことで、相手に伝わる言葉を考えてコミュニケーションを取ることができました。

続いて、「真ごころカード」について御紹介します。このカードの始まりは、新型コロナウイルス感染症のために学校が臨時休校になった時です。地域の高齢者はどう過ごしているのかという疑問から始まりました。日頃から学んでいる福祉を活かして、私たちができる活動は何か考え、介護福祉科の強みは、高校生プラスアルファができることだと考えました。

みんなが思うことは、「地域の幸せのために何が出来るか」です。カードに季節の折り紙や、健康豆知識を添えて手作りカードの作成を始めました。真岡の人々の心をつなぐ「真ごころカード」は、一枚一枚手作りです。毎月160枚、令和6年5月末現在で、約7,000枚を超えるカードを、地域に配布してきました。私たちは、高齢者を励ますことばかりを考えていましたが、逆に私たちの高校生活を応援する地域の声を聞くことができ、自分たちだけが大変ではないと改めて感じることができました。

昨年度、介護福祉科はこれらの活動が認められ、栃木県内における優れた社会貢献活動を表

彰する第7回「輝く“とちぎ”づくり表彰」で優秀賞をいただきました。

次は英語科が中心となって行った、国際的な平和プロジェクトについて御紹介します。

アンネ・フランクについて学んだ授業では、広島原爆の犠牲となった佐々木貞子さんの物語「The Story of Sadako」も読みました。共通点はどちらも、戦争の犠牲となった女の子の物語という点です。そして、授業は書かれたものを読むだけでは終わりません。

その後、私たちは平和な世界を築くには何が最も重要か、ということについて考え、平和の祈りを込めながら折り鶴を折り、その羽に英語で平和のメッセージを入れました。折り鶴は、貞子さんが折った本物の折り鶴が展示されている、ハワイ真珠湾のアリゾナ記念館に届けられました。このプロジェクトは、「Sadako Peace Cranes Project」と呼ばれ、今年で4年目の参加になります。

平和の折り鶴制作は、学校祭でも行われましたので、地域を巻き込んだプロジェクトとなりました。ユネスコスクールの役割の一つは、平和を大切にすることを学ぶことだと聞いています。このプロジェクトは今後も続けていきたいと思えます。

次は、国際的連携活動の実践です。本校は、昨年度より真岡市の友好都市である西オーストラリアハーヴィー市にある農業高校「西オーストラリア農業大学ハーヴィー校」との交流を開始しました。交流を始めたばかりでしたので、学校紹介動画を交換することにしました。

こちらは実際の動画撮影の様子です。真岡市のゆるキャラ「もおかびょん」を本校に呼び、オーストラリアの農業高校から友好の印としていただいた地域の鳥「アカオクロオウム」のぬいぐるみを登場させ、「もおかびょん」が学校中を逃げ回る「アカオクロオウム」を追いかけるストーリーの動画を制作しました。追いかける過程で、学校で行っている活動を紹介しています。それではムービーのダイジェストをご覧ください。

ムービーのストーリーどおり、「もおかびょん」は西オーストラリアのハーヴィー市へと旅立ちました。今は、オーストラリアの地で、生徒と学校生活を楽しんでます。なお、この活動はオーストラリア、ニュージーランドにて自治体関係者にメール配信されているニュースレターに掲載されました。

最後に、私たちが最近スタートしたE S Dの取組を紹介させていただきます。5月16日に、法政大学キャリアデザイン学部の坂本旬教授が本校に来校されました。坂本教授は、ユネスコスクールアドバイザーで、私たち生徒がこれまで行ってきた地域連携活動や国際交流活動をE S Dとしてさらに充実したものにするために、法政大学の学生さんたちで結成されたE S D支援隊を本校へ派遣して下さることになりました。現在、E S D実践隊は、1年生8名、2年生11名の、計19名で活動を進めています。

7月19日、地域の課題を調査するために真岡市役所視察ツアーを行いました。総合政策課より、まちづくりについての講話をお聞きし、市の課題について考えることができました。このツアーに、坂本教授とE S D支援隊にも参加していただきました。

8月8日、坂本教授とE S D支援隊の協力のもと、市役所訪問で学んだ地域課題を解決するためのプロジェクト立ち上げを行いました。E S D支援隊のアドバイスを受けながら、地域課題についてブレインストーミングをした後、グループで発表しました。私たちのグループのテーマは、国際的連携活動です。まずは真岡市市制施行70周年記念イベント協力から活動を始めることにし、自分たちが中心となってE S D実践隊全員で協力しました。

10月3日、真岡市の友好都市であるハーヴィー市から、市長やCEOで構成される使節団を本校にお迎えし、茶道部とE S D実践隊が中心となって、ウェルカムティーパーティーを実

施しました。その後、農場へ移動し、本校の特色ある農業について、英語で説明しました。

10月4日に行われた市制施行70周年シンポジウムでは、北陵高校の国際交流について発表しました。10月5日、真岡市の友好都市であるアメリカのグレンドーラ市、オーストラリアのハーヴィー市、台湾の斗六市の、3つの友好都市の市長をお迎えして行われた市制施行70周年記念イベントのパレードに、演者として参加し盛り上げました。

私たちESD実践隊は、生徒が中心となって本校がこれまで行ってきた地域連携活動を継続しながら、世界とのつながりを深め、活動の幅をさらに広げていきたいと思っております。

○真岡北陵高校校長

このような生徒の活動の基盤となる本校の教育目標について、紹介させていただきます。

今年度整理しました本校の新しい教育課題ということで、2つ挙げております。基本的な重点目標に加え、新たな目標として2点あり、その1つは、本校の魅力化の更なる推進です。先ほどのユネスコスクール・キャンディデート校として、専門高校としての本校の特色、強みを生かしたESD活動及びSDGs活動をより活性化することについては、既に農業高校として、あるいは総合選択制専門高校として、今まで継続して行ってきたことですが、それらは、従来から実施している各科による地域と連携した実践教育活動である課題研究活動や、プロジェクト研究、地域貢献活動、国際理解教育、日本語支援教育などがベースになっております。これを学校全体の取組として位置づけ、職員で理念を共有しています。その延長として、令和11年度、本校と真岡工業高校との統合に向けての新校設立準備があります。新校においては、未来共創型専門高校ということで、農業、工業、商業、福祉の学科横断的な学習を推進する、総合選択制専門高校への具体的構想を、今現在、職員と練っている段階です。その中で、新校のカリキュラムで、特に地域と連携した課題研究のための探究科目の新設も含めて、今後そういった活動や、取組を推進して行くということが今年度の重点目標になっております。

○事務局 真岡北陵高校の皆様、ありがとうございました。続きまして、益子芳星高校の皆様、よろしく申し上げます。

○益子芳星高校校長

本校は、今年度の入学生から、1学年3クラスとなった小規模特例校でございます。発表のタイトル「地域社会の未来を担う人材の育成」は、本校のスクール・ミッションとなっております。本校は創立20周年を来年迎えますが、創立以来、「まち」「ひと」とのつながりを大切にする学校をモットーに、地域との連携に力を入れて参りました。

画面に写っているイラストは、お手元の封筒の中にございますクリアファイルのデザインということになっております。このファイルは、昨年度までの3年間、教育委員会より「未来を創る高校生地域連携・協働推進事業」の指定を受けて、生徒たちが作成したものになります。益子町をPRするイラストと、関連するホームページにリンクしているQRコードが配置されておりまして、町の観光案内となっております。この後、生徒会長と副会長の3名が、これまでの本校の取組の主なところを発表いたします。どうぞよろしくお願いたします。

○益子芳星高校生徒 皆さんこんにちは。本日はこのような貴重な場をいただき、ありがとうございます。本校が取り組んできた地域との連携・協働の取組について発表したいと思います。どうぞよろしくお願いたします。

本日は次のような流れで発表させていただきます。まずは、取組の概要です。本校は目指す学校像として、「個性を伸ばす学校」、「夢へのチャレンジを応援する学校」、「豊かな人間性をはぐくむ学校」、「まち、ひと…つながりを大切にする学校」の4つを掲げており、「まち、ひ

と…つながりを大切にする学校」として、地域との連携、地域貢献活動を積極的に行ってきました。

今年の6月に公表されたスクール・ミッションにおいても、地域で活躍する人材となるべく、学校全体で地域との関わりをより深めていくことが共有されたところです。本校では、地域と連携し、豊富な地域資源や、教育力を生かした体験的教育活動及びボランティア活動を展開しています。地域との関係、信頼づくりや、生徒のもつ新たな一面の発掘をその目的としています。

社会教育、生涯学習の観点から、生徒個々の今後を考えた上で、重要な学習の場であると考えています。本校ではボランティア活動に一定時間参加した生徒には、「学校外における学修」という形で単位認定を実施しています。また、授業外だけでなく、授業の中でも地域と連携した教育活動が実践され、地域とのつながりを様々な場面で感じることができています。

ここで、いくつかの取組みを簡単に紹介します。まず、春と秋に行われている陶器市ボランティアの紹介になります。私たちは益子塾の皆さんと共に、平成20年度から観光案内所の運営やゴミ拾い、募金の呼びかけを行っています。今年の春の陶器市では、延べ130人強の生徒が、ボランティアとして参加しました。5月下旬には、陶器市で集まった募金50万円強を益子町長に渡しに行ってきました。活動を通じて、色々な人と出会い、同級生や趣味の合う仲間とはまた違った価値観や個性を持った人から、刺激や元気をもらうことができました。とても貴重な経験になりました。

次に、保育ボランティアです。本校には、保育コースが設定され、保育士などを目指す生徒は授業の一環として保育実習があります。しかし、他のコースの生徒も、放課後や夏休みなどの、長期休業を利用して、この保育ボランティアに自主的に参加することができます。参加した私たちは、小さい子供たちとの楽しいふれあいや、世話をする体験をしながら、保育の大変さを大いに学びました。こちらは保育ボランティアの実際の様子です。保育士を目指している生徒の中には、毎日のように参加している人もいます。参加する中で、子供たちとの関わりの楽しさを感じるとともに、先生方の様子も間近で見ることによって保育の大変さも知ることができると話してくれました。

次に、地域との新しい連携の形として始まった「ましこ未来大学」です。令和2年度に町民が対象の町民大学が終了し、本校と益子町が高校生まちづくり事業として立ち上げました。

令和3、4年度は、総合的な探究の時間を利用して、益子町の現状と課題などについて学び、町をより良いものにするための具体的な提案をするという形で実施されました。

令和5年度からの「ましこ未来大学」は、過去2年間実施して気づいたことを踏まえての実施となりました。具体的には、益子町役場職員等による講義は意義があったが、生徒の理解度には温度差があり、課題意識の形成には繋がらなかったのではないかと、そして、実践が伴わないので生徒の成就感や達成感が低かったのではないかとこの反省点がありました。

これらを踏まえて、学習プログラムの改革が必要であるとして、改定を実施しました。令和5年度からの学習プログラムの大きな変更点として、実践を中心にすることになりました。実践を核に据え、「生涯学習振興大会ー町民のつどいー」において、実践発表を行うこととなりました。

実践の取組としては、「だがしや楽校」というものを行いました。「だがしや楽校」とは、誰もが手軽に趣味、特技、遊び、作品などを見せる集いです。学校では学びづらいことを学び、学校とは異なるスタイルで学ぶ、もう一つの自由な学びの場という意味合いがあります。また、

遊びからも学ぶので、楽しい学びの場という意味合いもあります。「だがしや楽校」を簡単に説明したいと思います。

「だがしや楽校」は、現在尚絅大学の松田道雄教授が中学校教員として働いていた際に、駄菓子屋をヒントに考案したものです。個人の趣味や関心ごとを店出し形式で披露し合い、それらの見せ物を介して会話交流を楽しむことが、主な目的です。「多様な人の交流場所」となり、「どこでも容易にできる」ことや、「目的に応じてプログラムを設定できる」こと、そして「誰もが教える立場になり得る」こと、これら4つがこの取組の大きな特徴です。

この取組は、全国各地で行われており文部科学省のホームページにも掲載されています。取組の成果として、地域の多様な人々に関わることで、子供の情操教育や、大人と子供の交流、さらには地域社会の再生、活性化に貢献しているという報告も見られています。こちらが当日の取組の様子です。前日のリハーサルで、先輩方からいただいたアドバイスなどを参考に、調整を加えて本番に臨みました。当日はたくさんの来場者に恵まれ、不安や緊張がありましたが、無事成功させることができました。

こちらが、実践までのスケジュールです。9月の企画書作成では、行う事業の内容や目的、必要な物について記入しました。試作品づくりや、実験を繰り返して課題点を抽出します。抽出した課題について、講師として来ていただいているとちぎ市民協働研究会の広瀬先生や、町生涯学習課からの助言をいただきながら、作成を行いました。

こちらが、昨年度実施したプログラムの一覧になります。私が行ったのは、魚釣りです。親子を対象とし、ラミネート加工をした魚に磁石をつけ、竿の先端に付けたクリップで吊り上げるかたちで、魚釣りを行いました。自分たちで企画したもので子供たちに喜んでもらえることができよかったです。

昨年度の「だがしや楽校」では、子供を対象としたプログラムでしたが、今年はより幅広い年代を対象とした実践を予定しています。益子の人々のために、自分たちができることを考え、行動することを目的に実践を行えればと思っています。

ここで、今年度の取組の内容をいくつか御紹介させていただきます。こちらは、元宇都宮大学教授であるとちぎ市民協働研究会の広瀬隆人先生を講師に迎え、講義ワークショップを実施したときの様子です。地域づくりは「つながりづくり」であること、学校で学ぶ意義等についての講義の後、ワークショップを実施しました。ワークショップでは、それぞれの過去を振り返り、自分がいかに多くの人とのつながりの中で生きているのか実感することができました。

こちらは、入庁5年目以内の町役場職員に来ていただき、様々なテーマのもと座談会を実施したときの様子です。仕事内容とやりがい、大人になって感じる益子の魅力と課題など、若手職員とともに益子のことについて、いろいろな視点を得られる機会になりました。

こちらは、町内の施設見学を実施したときの様子です。社会福祉協議会、子育て支援拠点のましココハウス、中央公民館での事業内容や、地域住民のニーズについて説明いただいた後、高校生に考えてほしいことなどのお話をいただきました。

取組の成果を御紹介します。こちらの表は、令和3年度から令和5年度までの3年間、3年生を対象に実施したアンケートの結果です。取組の実践ができたと答えた生徒の割合が、年度を追うごとに増加し、昨年度は96%という結果になりました。取組の実践により地域連携の趣旨や意図が生徒に浸透していることがわかります。

こちらの表が、昨年度の学校評価アンケートの結果となります。生徒、保護者ともに地域連携に関する質問項目で「そう思う」と答えた割合が増加しています。生徒、保護者ともに、ス

クール・ミッションに基づいた取組がされているという認識が深まっていると考えられます。

こちらの表は、生徒が卒業までに地域連携の取組に参加する回数を表したものです。取組回数は年々増加していますが、生徒によって異なっているのが現状です。より多くの生徒が、各学年で参加できるよう、取組の工夫や改善を考えていかなければならないと思います。

その一方で、課題も浮かび上がりました。昨年度、1年生が総合的な探究の時間の取組として地域課題への提言を町議会議員に行う機会がありました。議員の方から、益子をより良くするために具体的な手立てについても考えてほしいという講評をいただきました。より多くの生徒が、地域の一員として何かしらの形で役に立ちたいという意識を持つことや、自分にできることを探求し、実践して行くことが大切であると気づかされました。

益子に住む、益子に通う一人として、どんな困り事があるか、どんな事ができたらもっと益子がおもしろいところになりそうか、もっと益子に入り込み、町の人と共に色々な行動ができるのではないかと、そんなことを課題として感じました。益子にもっと関わっていくためには、自分と社会との接点を増やして行くことが重要であると感じました。

今行っているボランティアだけでなく、地域の行事などにも関わることで、自分が地域社会に参画しているという実感を持つことができるのではないかと、そのように感じました。益子に関わる人を通して、自分たちも当事者として関わるができるのではないだろうか、益子の大人と関わることで、地域の課題との接点をつくることができ、自分たちがより地域に入り込むことができるのではないだろうか、そのためには、益子に関わる大人との接点を増やさなければならないと感じました。

そこから考えたのが、OTF大作戦、大人の友達を増やそう大作戦です。益子芳星高校の生徒が、大人の友達を増やすためにはどのような取組が考えられるのか、今後考えていきたいと思っています。

ブータンで提唱されているGNH研究の第一人者でもある福井県立大学の高野翔准教授は、まちづくり、地域づくりにおいては、居場所と舞台を作り上げていくことが重要であると述べられています。高野准教授が仰る居場所と舞台とはどんなものなのか、私たちが考える居場所と舞台を作り上げている取組について簡単に御説明します。

まず七井幼稚園での実践活動です。放課後、保育ボランティアの実践も行われている幼稚園で、保育コースの2、3年生が園児とのふれあいや交流を図る学習活動を通して、園児の発達の特徴などを具体的に理解するために行われています。授業の一環として、3年生が年に2回、2年生が年に1回、幼稚園に実習に行き、園児たちとのふれあいや交流活動、授業で作ったエプロンシアターを園児たちに発表するなどの取組を実践しています。

令和4年度に実施した、「オヤケコフズフェス」では、無印良品を手がける株式会社良品計画とコラボレーションしました。そこでは、地元の魅力を生かしたイベントをどう開催するかを話し合う中で、益子町が元々行っていた、桜と菜の花まつりを小宅古墳群と組み合わせてPRしようということになりました。祭期間内には、一日限定のフェスとして、キッチンカーや野菜の直売、無印良品商品の特別販売のほか、オブジェを作成して展示、竹馬の体験なども行いました。

今年の陶器市では、新たな取組も実践しました。一般社団法人ましコラボと連携し、陶器市などで益子を訪れる観光客向けのアンケートを作成し、協力依頼を呼び掛けました。アンケートの結果を見ると、ゴミ箱などの環境面については、満足度が下がっているということが分かりました。昨年度、1年生の総合的な探究の時間で、陶器市をより良くしようというテーマの

もと、ゴミ箱を増やすことを提案しました。このことを踏まえ、今年の秋の陶器市では、ごみの減量を目的としたリサイクルステーションの設置を、観光協会、益子塾と協力して行おうと思っています。

まとめになります。これから、多くの益子芳星高校の生徒が、「地域住民との接点」を持つようにする、「居場所」と「舞台」を体感することができるようにするには、地域と連携・協働した取組を、学校の授業や委員会活動などと関連付けていくことが重要であると考えました。それらと関連付けをすることで、生徒が何かしらの形で地域との接点を持つことができるとともに、生徒にとっての「居場所」と「舞台」を感じる機会ができ、生徒自身の成長のきっかけにもなると思うからです。

現在行われている授業をもとに、どのような取組ができるのか、私たちが考えたものです。益子町には、本校の取組、教育活動に深い理解を示してくださる地域の方が多くいらっしゃいますので、取組をしたいという動きになれば、これらも実現できるのではないのでしょうか。他の授業でも実現できそうなものがあると思いますので、学校運営協議会の方々をはじめとする大人と話し合う中で、実現できればと思っています。

このように、学校と地域が協働していくことで、地域とともにある学校がつくられ、地域の人と共有した教育課程が実現できるのではないのでしょうか。また、地域の人々も生徒と交流することで、日々の生活が充実したものになったという声を聞くこともできています。地域も活性化し、学校も活性化する、そして私たち生徒も大きな成長のきっかけを得ることができている、そのような相乗効果があるのではないのでしょうか。私たちが得た地域とのつながりや学んだ力を、これからの後輩たちにもぜひ繋げていけるよう、今後も継続していきたいと考えています。

以上で益子芳星高校の発表を終わりにします。ご清聴ありがとうございました。

○福田知事 ありがとうございます。

まず、真岡北陵高校の皆さん、ありがとうございます。第7回「とちぎ次世代の力大賞」、受賞おめでとうございます。さらに地域で活動しながら、社会に参画する力を育む教育の実践について学校を挙げて、生徒の皆さんと共に取り組んでおられることについて、心から敬意を表したいと思います。

市制70周年記念式典の後、パレードや交流会も行い、国際理解にも繋がったのではないかと考えております。これからも学校の良さ、そしてこれまでの実績などを十分に活かしながら、社会に参加する力を大いに育ててほしいと思います。発表ありがとうございました。

また 益子芳星高校の皆さんもありがとうございます。陶器市のボランティアの際に、募金が50万円集まり、町役場に寄付したという話でしたが、どのように集めたのですか。

○益子芳星高校校長 ボランティアを7日間実施しまして、生徒たちが益子焼の壺を持ち、観光客に呼びかけ続けた結果、多くの観光客が次々に募金をしてくださいました。かなり多額の寄付をされる方もいらっしゃったものですから、50万円以上が集まったところでございます。

○福田知事 例えば赤い羽根募金といった街頭での募金活動もありますが、寄付を呼びかける時に、「地域の活力を高めるために使います」など、募金の目的や活動の内容をどういうフレーズで呼びかけたのでしょうか。

○益子芳星高校校長 具体的なフレーズは、その日その日で担当した生徒たちが考えて呼びかけるのですが、春の陶器市では、能登半島の地震で被災された方々を救いたいと言うことで、生徒たちが非常に親身になって呼びかけた結果、これだけ集まりました。その姿に感動した一般の

方が、下野新聞の読者登壇に投書してくださって、非常に評価してくださったということもございました。

○福田知事 ありがとうございます。我々にとっても50万円を集めることは難しいことなので、すごいパワーだと改めて感じました。町役場を通じて被災地にという、被災地を思う気持ちが尊いと改めて思いました。

地域と共にある学校を実現するため、色々とやり取りや試行錯誤をしながら、取組を進めていますが、参加している生徒の皆さんの達成感が年々高まっており、96%まで行っているとありました。まずは事を成す人が成果を感じられないと続かないことだと思いますが、それが100%に近いということは素晴らしいことだと改めて思いました。

これからも地域と共にある学校の実現に向けて、まだまだ発展途上だと思いますので、試行錯誤を繰り返しながらステップアップし、後輩にも伝統を引き継いでいってほしいと思います。

ありがとうございました。

それでは、2校から説明がありましたので、委員の皆さんから、それぞれの立場でご意見をうかがいたいと思います。

それでは、鈴木委員をお願いします。

○鈴木委員 ご説明ありがとうございます。教育委員として、6年程前に真岡北陵高校に見学に行ったことがあります。その時は、とても寒い日でしたが、とても大きいスカイベリーを食べさせていただいて、とても甘くて美味しかったのを覚えています。当時、教育委員会の事業の起業家育成プログラムとして、イチゴのスイーツを作り販売するまでの過程で、コストと利益を計算しながらストーリーをまとめて発表していただきましたが、その際スイーツもいただきました。とても美味しくて、立派に取り組んでいて素晴らしいと思いました。

その時にはまだ見せていただいていた部分も、今日は発表していただきまして、中でも海外とのやり取りも面白いです。ムービーを作って、英語で説明するという事で英語力も上げていくのだなと感じました。これからも楽しみながら学んでいってください。

そして、益子芳星高校のボランティア活動については、町役場としっかり連携し、町の課題を深く理解することができていて、こちらもとても素晴らしいと思います。自分たちの市や町、幸せのために何ができるかと仰っていましたが、高校卒業してからも、愛着をもっていただきたいと感じました。

○福田知事 ありがとうございます。松金委員、お願いします。

○松金委員 私は大学で教員をしていますが、大学生でも中々難しいことを、よく活動されたと感じました。努力の結果とっております。

質問ですが、まず真岡北陵高校では、ESDが課題だという視点には、さすがユネスコ・キャンディデート校だと思います。こちらはおそらく世界の共通課題になる話と思いますが、オーストラリアの学校とESDに関するやり取りは何かありますでしょうか。特に農業や介護といったことに関するものがあつたかを質問させていただきたいと思います。

もう一点が、益子芳星高校の取組について、重要なキーワードとして、まちとひとを連携させるというものがあつたと思います。発表のまとめにありましたが、「居場所」と「舞台」の体感」というものを色々な高校の生徒と共有して行くと良いのではないかと考えています。質問ですが、今日いらっしゃっている生徒の皆さんにとって、この活動の中で「居場所」と「舞台」は何だったのかを具体的にお聞かせいただければと思います。答えられる方だけでも結構です

し、先生にお答えいただいても大丈夫です。

○真岡北陵高校校長 オーストラリアの農業高校との交流については、昨年度からオンラインでの交流が始まりまして、地域の農業の担い手育成という点で、お互いに学んでいる事が共通であるというところから始まりました。やはり渡航費の関係で実際に行くことができませんが、これから委員の仰るような専門学習を通じた交流も深めていきたいと思っています。

本校の場合には、学科を通じた縦の繋がりに加え、例えば、今回発表をしましたE S Dについては、英語科の教員が積極的に取り組むなど、普通科の教員の横の繋がりも持っており、学科横断的な活動が出来ております。そのような中で、今後、オーストラリアの学校との専門学習や国際交流を進めていきたいと思っています。

○益子芳星高校校長 居場所と舞台については、本日来ている3名の生徒は、生徒会会長と副会長ですが、特に生徒会役員は、陶器市でのボランティアとして大活躍した中心メンバーです。陶器市では、色々な方から、ゴミ拾いや道案内などの活動に対して「ありがとう」「がんばっているね」という声をかけていただき、そういったことに「居場所」というものを感じることが出来たのではないかと思います。そこが本校の生徒にとって、活躍の「舞台」というものにもなります。発表の中にもありましたように、観光客の皆さんにも爽やかな感覚を与えることができているということで、お互い非常に良い関係が出来上がっているのではないかと考えています。

○松金委員 ありがとうございます。陶器市が「居場所」と「舞台」であるということは、自分たちが益子にいるということを感じられ、他の場所ではできない貴重な経験だと思いますので、是非活かしていただきたいと考えます。

また、E S Dの取組は中々難しいと思いますが、発表の映像の最初の表紙にタンポポがありました。タンポポは、E S Dの中で持続の象徴として使われるものですから、その表紙だけでも先方には伝わるかもしれないと思い、質問いたしました。ありがとうございました。

○福田知事 ありがとうございました。永島委員お願いします。

○永島委員 真岡北陵高校は私の母校でして、とちおとめがまだ名前がついていない頃、農業試験場から高校に苗が持ち込まれ、ハウスに苗を植えたことを思い出しました。その時は、自分がこのような席で話をすることは想像していませんでしたが、皆さんにも色々な未来があるため、これからもがんばっていただきたいと思いました。2校とも素敵な活動をされているため、この活動を内外にPRしていけたら良いと思いながら聞いていました。こういった活動をされている高校があるにも関わらず、県東地区は軒並み高校が定員割れをしている状況があるため、もっともっと、小学生や中学生、地域の皆さんにこの活動を広げていけたら良いと考えています。

2校に質問させていただきたいと思います。真岡北陵高校のE S D実践隊は、活動のコアとなるメンバーだと思いますが、それ以外の生徒の方へのどのように活動を浸透させていくのか、どのように学校での機運を高めていっているかをお聞きしたいと思います。

益子芳星高校については、学校があるということで、地域が元気になる取組であると思います。私も地域で実践者として活動をしている中で、私たちがコーディネーターとして「居場所」と「舞台」を用意し、ボランティアに来ていただくという場面をつくる側なのですが、そのことを自ら生徒が実践しているということは、とても素晴らしいと思いました。その輪を広げていくためのツールにはどのようなものを使っているのか、また、生徒同士のコミュニティ作りや仲間の集め方などがあれば、お聞かせいただければと思います。

- 真岡北陵高校教諭 ESD実践隊の結成は、生徒主体のESDを、生徒自身によって広めるというのが目的です。生徒には明確に説明していませんが、現在は教員が生徒に対して研修のような形で、やってみてはどうかということをご提案し、色々なものに挑戦させ、生徒に自信と達成感をつけてもらう時期と考えています。
- 来年度に関しては、どんなことを行ったらいいか、また他の生徒をどう巻き込んでいくか、ということをご仕掛けるつもりです。
- そもそもの目的は、生徒主体のESDを、どうやって他の生徒を巻き込んで、学校全体で取り組んでいくかですので、長期的な視野をもち、1年目はゆっくりと成功体験を積み、そして2年目からは勇敢に挑戦し、ユネスコの理念であるホールスクールアプローチを広げていきたいと思っております。今はその準備段階ですので、引き続き取り組んでいきたいと思っております。
- 益子芳星高校校長 人の繋がり方について、本校では主に生徒会役員が中心になっていますが、福祉委員会も募金活動などでかなり中心になって活動しております。今も、能登半島の豪雨災害に向けての募金活動が始まったところです。他にも、JRC部があり、ボランティア活動に盛んに参加しています。こういった複数の組織が、自分の友達に呼びかけ、益子陶器市の際には、130名近くの生徒が参加する形となりました。また、七井幼稚園のボランティアについては、本校に設定されている6つのコースの内、保育コースの生徒たちは、授業の中でも幼稚園で保育実習を行います。加えてボランティアにも参加しています。こちらにも、生徒会や福祉委員が関わり、その友達に広まっていくことで、ボランティアの輪が広がっています。
- 福田知事 ありがとうございます。それでは板橋委員をお願いします。
- 板橋委員 ご説明ありがとうございました。学校と生徒、地域が取り組んだ様々な活動の話をお聞きして、自分の学生時代にはできなかったことだと感じ、うらやましく思いました。
- 生徒の方にお聞きします。普通の授業とは異なる体験だったと思いますが、普通の授業と比べてみて、大変だったこと、良かったことを一言ずついただければと思います。
- 真岡北陵高校生徒 他の高校とは違ったことを真岡北陵高校では勉強できます。例えば作物の収穫や、牛や豚の世話をするなど、体を動かすことが多いです。体を動かすことは大変だと思うことも多いのですが、自分たちだけが学んでいることだという感覚があり、一般の人が体験できないようなことを今の段階で体験出来ているということが楽しくて面白く、未来のためにもとてもいいものだと思います。
- 真岡北陵高校生徒 真岡北陵高校の良いところは、自分の学科だけでなく、学校全体で活動できるので、自分が興味なかったところに興味を持てることだと思います。つらかったことは、やはり体力を使う活動が多く、大変ですが、それでも達成感があるので、楽しく過ごせています。
- 真岡北陵高校生徒 真岡北陵高校の良いところとしては、それぞれ自分に合った学科があり、学校生活が楽しいものとなっています。体力的な面は大変ですし、苦勞も多かったのですが、達成感とみんなで協力をできることの方が大きいと思います。
- 益子芳星高校生徒 活動する中で大変だったことは、様々な価値観を持つ方や小さい子などに、どのように接すれば楽しく活動できるのかを考え、コミュニケーションを取り合うことが、とても大変でした。良かったと思う点は、私はオヤケコフンズフェスに実際に参加しました。私はコースターが付いた椅子を作りました。提案をしたものの、実際には出来ないと思っていましたが、大人や地域の方が、「それいいね」と言ってくれて、実際に活動することができました。とても嬉しかったですし、実際にこんなことができるのかと驚きました。
- 益子芳星高校生徒 良かったこととしては、令和5年度の「ましこ未来大学」の取組として、9班

がそれぞれ一から企画を作り、実践に移し、成功や失敗を繰り返しながら、最終的には成功に繋がったということが、大変でしたが、とても良い経験になり、楽しい経験にもなりました。

○益子芳星高校生徒 益子芳星高校は人との繋がりを大切にする学校であり、授業の中で、そのことを説明していることが良いと思いました。学校に入って、自分も人とのつながりを深めたことができたと思いました。私は、人と関わるのが苦手でしたが、陶器市では学校のおかげで多くの人と話し、関わるのができたのではないかと思います。

○板橋委員 ありがとうございます。皆さんの生の意見が聞けて大変嬉しく思います。

○福田知事 ありがとうございます。阿久澤教育長お願いします。

○阿久澤教育長 本日は本当に良い発表を聞かせていただき、ありがとうございます。教育というのは社会で生きて行くための力だということを今の発表を聞いて改めて実感しました。皆さんの笑顔を見ていると、どちらも魅力がある学校だと思いましたので、こういった学校づくりをこれからも広げていきたいと思います。どうもありがとうございました。

○福田知事 改めて、真岡北陵高校、益子芳星高校の生徒と先生の皆さんに心から敬意と感謝を申し上げたいと思います。これからも益々活動が活発化するよう、期待をいたします。また、その応援を、県も教育委員会も行って参ります。

委員の皆様方からも様々なご意見をいただきまして、ありがとうございました。本日の発表を聞きながら、生徒が社会の課題を自分のこととして捉えて身近なところから解決に取り組む力、所謂社会参画力を育成して行くためには、地域との連携が欠かせないこと、また、これからどのように連携していったらいいのかということについてのヒントがあったのではないかと思います。そして、複数の学科が連携して課題の解決を目指す学科横断的な学習の推進も重要なことですが、そういった関係機関との連携をどのように図っていけばいいのか、ということを考えていかなければならない、更なるきっかけになったと思っております。両校の繁栄と、皆さん方の活動を県全体の教育行政の中に今後活かすことができるよう、しっかり取り組んで参りますことと、委員の皆様方にはご尽力を賜りたいと思います。

議論は尽きませんが、予定の時間になりましたので、終了としたいと思います、委員の皆さんから、幅広い意見を伺い、情報を共有することができました。一連の議論につきましては、今後の施策検討の参考にして参りたいと考えております。

それでは、以上で協議を終了します。

4. 閉会

○司会 以上をもちまして、令和6年度栃木県総合教育会議を閉会いたします。本日は、ありがとうございました。